



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	グリーフケアの社会的分析：医療化モデルの限界をケアネットワークで乗り越える
Author(s)	横山, 聖美
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(人間科学)
Dissertation Number	甲第17042号
Issue Date	2026-06-30
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k17042
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/100095
Type	doctoral thesis
File Information	Satomi_Yokoyama_abstract.pdf, 論文内容の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（人間科学）

氏名：横山 聖美

学位論文題名

グリーフケアの社会的分析—医療化モデルの限界をケアネットワークで乗り越える—

・本論文の観点と方法

本論文の目的は、死別を経験した遺族への支援を医療化された個人の心理支援に留めることなく、グリーフケアを社会的関係性および地域支援構造の中で捉え直すことで、家族や地域、支援団体による緩やかなコンパッション・コミュニティを構想することにある。グリーフケアを医療・心理職の専門的ケアに委ねることは個人と社会の医療負担を増大させ、現実的に医療資源が不足する地方自治体では望めないケアのあり方である。しかも、悲嘆の様相と回復への道のりは個別的であり、地域における支援ネットワークの構造や、ジェンダー・世代といった社会的属性によっても異なり、従来の定型的な捉え方では実践的なソーシャルサポートも十分ではないことが明らかになっている。

著者は、20 年来、グリーフケアの自助組織を自ら運営し、ガン看護の専門看護師として臨床経験も積み、看護学科で准教授として看護学を教えている。上記の問題を明らかにし、実践的なグリーフサポートのモデルを構築するために、6つの個別研究を行ってきた。

本研究では、①地域の民間グリーフケア支援団体の実態調査、②若年女性遺族の支援ニーズ調査、③中高年男性遺族の支援ニーズ調査、④コロナ禍での死別と悲嘆の潜在化・複雑化の事例研究、⑤がん患者の在宅看取りの事例研究、⑥中高年遺族のグリーフケア学習と講座産業の実態調査をふまえて、公的社会保障による制度的支援の不足を補完するために自助グループを活用する市民活動の新しい動向を明らかにした。同時に当事者・医療関係者・行政・民間支援団体が相互に関連する支援ネットワークのハブとなる「中間支援組織」の役割が重要になると示唆して、地域グリーフケア支援モデルの可能性を論じている。

・本論文の内容

本論文は、「はじめに」と「おわりに」を除き、本論が全8章で構成されている。以下に章ごとの要約を記す。

第1部「医療化モデルへの社会的応答」

第1章では、死別・遺族研究およびグリーフケア研究において支配的であった医療化モデルの限界について検討した。医療化により死別への対処は感情表出型グリーフケアに偏在し、当事者の社会的・関係的側面を弱めることにつながり、専門家主導の支援構造が、当事者の多様な経験を包摂しきれていない点を指摘した。

第2章では、地域で活動している遺族会やグリーフケアの民間団体の活動実態を明らかにした。グリーフサポート団体の8割がマンパワー不足や広報能力、開催施設などのリソースに脆弱性があつた。また、コロナ禍では遺族の孤立が進み、死別による悲しみや辛さの苦痛が増したとネガティブに捉える面が確認される一方で、自分に向き合うことが増え、結果的に自助グループ主催の会への参加に繋がったケースも確認された。

第2部「看取りとグリーフケアにおける多層的支援」

第3章では、若い世代、子育て中、母親というグリーフ・リスクが高い人を対象にし、死

別後の日常生活の体験から、支援ニーズを明らかにした。支援への示唆としては、子どもに父親の病状や病気の経過を伝えないことは、死別後の悲嘆反応に影響を及ぼすため、子どもが親の看取りに参加でき、納得できる別れができるように配慮することが必要である。親を亡くした子どもと、子育て中に配偶者を亡くした母親という 2 つの悲嘆を親子で乗り越えることへの支援の必要性が示唆された。

第 4 章では、中高年世代、男性を対象にし、死別後の日常生活の体験から、支援ニーズを明らかにした。特に定年退職後の中高年男性には「居場所があること」、語らないグリーフを抱える人であっても、「語ることで人の役に立つこと」の意義が見出された。従来有効とされてきた、当事者同士で語り合う情動焦点型のグリーフケアと男性が求める支援にはミスマッチがあった。男性遺族への支援には、男性性の規範に配慮した、自己の体験を一般化し、物語として構築する作業として文書等の表現物を残すことが有効であることを明らかにした。

第 5 章では、コロナ禍という時代性の観点から、看取りが医療管理されたものによっていく経過を特徴として示し、医療化された死が顕在化した実態を明らかにした。特に、亡くなるまで数ヶ月、看取りの時も面会できなかった家族のグリーフは深い。十分な看取りができず、死の実感を持つことができない「あいまいな喪失」の提示は、悲嘆を個人の心理的問題として回収する医療化モデルの限界を示したと言える。

第 6 章では、看取りのポジティブな側面として、在宅看取りを行なった家族の語りから、患者と家族の体験をウェルディングの視点から分析した。がん患者は、積極的治療から緩和的治療への移行期に大きな喪失を経験する。しかし、患者は治療から解放されて自宅に戻り、住み慣れた場と日常がもたらす幸福感を感じていた。ケア提供者は患者・家族の関係性のウェルビーイングを理解し、自宅で実現されるウェルディングの意味を言語化し、患者・家族に伝えることが重要であることが示唆された。

第 3 部「グリーフケアネットワーク構築における課題」

第 7 章では、中高年女性が家族ケアの経験をどのように受け止めて意味付けし、学習行動に繋げるのかという学習動機を明らかにするために 2 つの調査を行なった。意識調査からは価値観の男女差を、インタビュー調査からは中高年女性の学習行動について分析した。男女の価値観の違いは、家族や友人の死が女性の生きがい再構築に与える影響や、死別経験が新たな目標や役割形成に与えるプロセスにも影響すると考えられる。そのため、生きがい支援としての生涯学習の可能性を探るために、資格取得による社会的役割や生きがいとの関連性を探り、生涯学習プログラムの整備と支援策の開発を議論する必要があることが示唆された。

第 8 章では、地域でグリーフケアに関わる支援者を対象とした調査データをもとに、支援者として関与した動機、役割意識、学習ニーズの特徴を明らかにした。支援者の勉強会参加の動機から、「支援の中での割り切れなさ」を抱えているが、専門職としての制度の中で学習機会がないことが明らかとなった。学習ニーズの分類は、実践振り返り型、知識補完型、地域貢献・ボランティア型に分類されるが、単一ではなく、複合型の動機が学習ニーズにつながっていることを示した。